

## 「教育活動」ハイライト

### 本物に触れることで意欲と関心を高める学習の試み 法文学部人文学科 山川廣司教授

少人数学生参加型授業については、ヨーロッパ歴史文化論演習において、課題を与え自発的学習を促すと同時にビジュアル機器を利用して学習意欲の涵養に努めた。西洋史特殊演習においては、授業の進行のイニシアティブを学生に委ね、教員はできる限り学生が主体として議論を遂行するよう配慮し、最後に講評で形態及び内容について発言した。学生たちに議論への参加と発言を促すことで、学生達はかなり主体的に複数回発言し、討論等を通じてコミュニケーション能力が付いたと思われる。また、西洋史実験室にパソコンをさらに1台設置し、参考書籍や視聴覚機器を整備することで、学生が主体的に勉学する環境を整えた。学生達の自主ゼミについてもその遂行のための環境支援を行った。9月には城川町宝泉坊ロッジで3泊4日のゼミ研修合宿を行い、全員研究発表を行った。年度末に学生たちは1年間の研究のまとめ『エウロペー』第8号を発刊し、研究の蓄積を行った。大学院生の研究支援としては、講義以外にも個別に話し合いをして修士論文のアドバイスをを行い、他大学の研究者にメール等で連絡をし、院生の研究アドバイスを依頼した。

また、課外活動として松山の愛媛県立美術館をはじめ大阪、京都、神戸等に複数回出かけ、博物館、美術館での研修を行った。6月2・3日に県立広島大学で開催された中国四国歴史地理学協会大会に院生4名（学部生も2名）を引率し、研究上の教示と交流を深めた。また学内で開催された多文化社会研究会公開シンポジウムや四国遍路と世界の巡礼公開シンポジウムにも積極的に参加するよう呼びかけ、研鑽を促した。この他、直接ヨーロッパの歴史・文化に触れるべく、9月28・29日に院生、学部生を引率して大阪市博物館で開催された「ペルシア文明展」、兵庫県立美術館で開催された「巨匠と出会う名画展」を、10月30日には愛媛県立美術館で開催された「国立ロシア美術館展」、3月に「プラハ国立美術館展」を、また12月1・2日に西洋史合同のゼミ旅行を行い、京都文化博物館で開催された「トプカプ宮殿の至宝展」、神戸市博物館で開催された「インカ・マヤ・アステカ展」を鑑賞する等、西欧文化に直に触れるため積極的に学外での研修を行った。

### 表出的学習方法の工夫と形成的評価の試行

### 法文学部人文学科 清水史教授

教育方法の改善に向けた工夫として、授業の内容を分かりやすくビジュアル化するために、文字情報を可能な限り削り、図解を見せることで全体の構造や流れを把握できるような工夫を行った。その結果、「視覚教材が工夫されていた」、「すごく見やすかった」、「分かりやすかった」等々の意見が大多数を占めた。今後さらに講義内容の平易さと効果的なビジュアル化の方法について、改善を継続していきたい。また、授業の終わり10分間を利用して、毎時間ミニッツ・ペーパーを配布して、授業内容をまとめさせた。これにより当該の授業の理解度がよく分かり、全体的に未消化な部分は次回に補うことができた。質問や感想も書くことができるので、双方向のやりとりができるという実感を学生側でも持てたようである。さらに、今期も、大街道、銀天街、柳井町、花園町、萱町、道後等々に見られる言語情報表示に関する言語動態調査を実施した。グループごとに調査域を設定し、情報を収集、分析、発表、討論を行い、結果をデータベース化してまとめた。現地踏査に基づく主体的な観察及び結果の考察を通じて学生個々の考えを提示できるような表出的学習の場を設けることができた。フィールドワークのため、雨天は大学で演習を行い、現地調査にあっては、開始及び終了時刻を調整し、大学の往復に十分な時間を設けるなど安全面に配慮をした結果、1件の事故もなく終えることができた。

こうした教育改善に加えて、成績評価について、シラバスにおいて、授業の目的と到達目標及び成績評価の方法について明記し、受講生に成績評価基準の周知を図った。到達目標の個々について、その達成の状況を把握するための方策として、まとまった単元毎に小テストや発表

を課した。最終授業時には、個々にアセスメント・シートを配布し、到達目標が達成されたかどうかを点数化して自己評価してもらった。15回の授業の蓄積の中で、学生や教員が自ら得心のいくような評価体制を構築することこそ、教育にとっては大切である。今回の形成的評価の試行は学生にも学習過程における「振り返り」の機会を与えることができたと思量される。

## 学生の「関係の豊かさ」と「深い感動体験」の構築を目指す課外活動における取組

教育学部 牛山眞貴子教授

### <2007年度取組の内容>

課外活動を通して、学生の「関係の豊かさ」と「深い感動体験」の構築を支援するために愛媛大学ダンス AZ（ダンス部・全学サークル／部員数 56 名うち男子 20 名、女子 36 名）の体づくり、ダンス・スキル、創作スキルの指導、健康管理、精神的ケアに関するマネジメントを年間通して行っている。以下、活動の中から、3つの評価を受けた対外的な取組について述べる。

#### (1) 全国規模の学生ダンスコンクールへの挑戦

学生の全国ダンスコンクールへの応募創作作品「放浪紳士はゆく-goodness-」を指導。私の専門分野がダンス教育であることから、制度上必要な顧問の仕事だけではなく、大学におけるもう一つの教育の現場として課外活動を捉えて、指導を担当している。私は、オフシーズンは週4日の練習指導とミーティング、シーズンに入るとほぼ毎日指導にあたる。コンクール作品指導もその一環である。部員は、「日本一感動的な作品を踊る大学生になる」ことを目標に日々練習している。しかし、全国コンクールの最高位や受賞は、学生の現状の力だけで、容易に達成できるような生易しいものではない。そこには学生の力量を引き上げるコーチングが必要であり、それが私の担うべき役割である。学生の自主性を尊重しながら、教員が指導にどこまで関与すべきか、その距離の取り方は難しいが、「仲良しクラブ」ではなく、真剣に学び成し遂げようとする高い意識を部員が持ち続け、その指導者として私の存在を求める限り、とことん付き合うことを心に決めている。

この取組の成果として、第20回全日本高校大学ダンスフェスティバル・コンクール部門にて日本女子体育連盟理事長賞（最高位文部科学大臣賞に次ぐビック3と称される主催者3賞のうちの一つ）を受賞（2007.8.8）。その受賞により、特別プログラム作品として神戸文化ホールにて受賞作品を上演（2007.8.9）、NHK教育テレビにて受賞作品として紹介され、全国放映された（2007.8.20 2007.9.2）。

また、本成績を高く評価していただき、課外活動における優秀な団体として愛媛大学学長賞を受賞した（2007.11）。

#### (2) 愛媛県文化振興財団芸術文化事業「感動！ダンス体験プロジェクトーダンス・コラボ EHIME2007〜」への参加

主催 （財）愛媛県文化振興財団 助成（財）地域創造

後援 愛媛県 愛媛県教育委員会 松山市 松山市教育委員会 他

愛媛県文化振興財団が2005年から行っている愛媛大学ダンス AZ と愛媛県下の高校生とのダンス作品共同制作（コラボ）は、大学生が指導の主体となって高校生の感性を引き出しダンス創作・上演するという、全国でも例のない愛媛県独自のダンス企画である。私たちは愛媛県文化振興財団からの依頼を受け、松山大学ダンス部にも声をかけ、東予・中予・南予の3カ所で愛媛大学ダンス AZ と高校生（3校のダンス部員）、松山大学ダンス部と高校生によるダンス作品を共同制作した（2008.1）。

さらに、その作品群と公募による高校生作品、大学生作品を加えたダンス公演「ダンス・コラボ EHIME2007」（愛媛県民文化会館サブホール）（2008.2.10）が開催。愛媛大学ダンス AZ はオリジナル2作品と高校生とのコラボ作品3作品を上演した。私は、共同制作時の3会場を巡回し、作品助言を行ったほか、本公演では企画・演出・進行・解説を担当した。この取組の成果として、①教育学部所属のダンス AZ 学生が志願して高校生の指導を担当し、貴重な経験を積むことができた。②この事業は高校生からの反響が大きく、好評のため、愛媛県文化振興財団

は、早々に次年度の継続を決定し、次回の愛媛大学ダンス AZ と私への依頼が既に決定している。この事業への参加・協力は学生のリーダーシップ育成、高大連携並びに地域文化との関係づくりに貢献するものであった。

### (3) 自主公演の創造

愛媛大学ダンス AZ は毎年 12 月定期公演を自主開催している。この公演も 24 回目を迎え、有料公演でありながら毎年 2,000 人以上の観客（県外からの観客も 300 名以上含む）公演に成長している。私は、作品指導、舞台監督として総合演出を担当している。この取組の成果として、2007 年度は 12 月 8 日 9 日の 2 日間で 3 回公演、約 2,500 人を集客した。全国の大学の中でも、この集客力と公演内容のクオリティーの高さは群を抜いており、ダンス専門雑誌（全国誌・東京）「DDD」から 2 年連続で記者が取材に訪れ、紙面で紹介した。本公演は、ダンス作品を創り踊ることだけでなく、部員が、企画、財務、総務（スタッフの手配、公演スケジュール、挨拶・お礼状等）渉外（会場予約、後援依頼、広告、広報、ポスター・リーフレット・チケットのデザインから制作・販売、来年の予約まで）一連の仕事を分担して行っている。学生一人一人が華やかな舞台上でダンサーとして立つことと同時に、そのための地道な舞台づくり（裏方の仕事）を経験することによって、感動体験を「踊ることは楽しい」という浅いエリアからより深いエリアへ深化させ、地域と学生及び学生相互の関係の豊かさを築いている。

近年、多くの学生が「関係の豊かさ」＝「他者との関係そのものを味わうことで、ある種の豊かさを享受する」という価値観（菅野仁 2007）を大切にしており、それが大学生活の充実感に直結していると考えている。しかし、現実にはコミュニケーション・スキルが本当に未熟で、そんな自分に苛立ち、孤立感に悩んでいる。また逆に、コミュニケーション・スキルの高い学生は、専攻などの限定された属性の人間関係の中だけでは吹きこぼれ状態にあり、属性を超える人との出会いや真剣な活動での深い感動体験を模索している。この現状を切り崩す可能性を課外活動は有している。学生たちは皆、これからも生きていく中で、思うようにいく・いかない、勝ったり負けたりを繰り返すだろう。すぐに諦めて投げ出さない、敗北や挫折に屈しない「自分を支える力」のために「関係の豊かさ」と「深い感動体験」を学生時代に培ってほしいと願う。

## 教員研修とリンクさせた協同的な学びによる理科教員養成の授業改善

教育学部 渡邊重義准教授

教員養成において求められることは多岐に及ぶが、筆者らは理科教育実践力の育成を第一の目標に掲げて、以下のような授業改善に取り組んできた。

- ①教員養成におけるカリキュラムとしてのつながりや連携を導くために、理科に関連した授業内容等の見直しに関する話し合いを理科教育講座の関係者で行った。
- ②教育現場が求める理科教育実践力を明らかにするために、小・中・高校の現職教員をシンポジストに迎えた第 1 回理科教育シンポジウム（2006. 2. 18）を開催し、「理科的センス」「知的な好奇心」「自己教育力」「課題解決能力」「得意分野」などの理科教育実践力に関わるキーワードを得た。
- ③教育学部が主体となった現職教員の研修会を 2006 年度から定期的に行い、日常的に大学教員と現職教員がかかわり合う場づくりに取り組んだ。2006 年度は合計 9 回で延べ 92 名、2007 年度は合計 8 回で 111 名の現職教員や大学生等の参加者があった。
- ④現職教員を対象にした研修会の開設に合わせて、その機会を教員養成としても有効に利用する計画を立てた。「理科教育実践研究 I」という授業では、理科教育研修会のワークショップにおいて、現職教員に向けて授業成果を発表することを目標にした授業改善を 2006、2007 年度に行った。
- ⑤第 2 回理科教育シンポジウム（2008. 2. 9）を開催して、小・中・高校の教育実践の事例報告と、教員研修の現状と問題に関する討論を行うとともに、教員養成と教員研修をリンクさせた授業改善の取組についての経過報告を行った。

①～⑤は、一つの授業の改善を数年かけて計画的に進めていったものであり、カリキュラム上の授業の位置づけの確認、現職教員や教育実践と結びつけるためのネットワークづくり、授業改善を推し進めるための教員の組織づくりなど授業の根底にある諸要素から、授業改善の根本的な課題解決に取り組んだプロセスである。この①～⑤のプロセスには理科教育講座の多くの教員が関与している。

「理科教育実践研究Ⅰ」の授業改善を例にすると、1回生で受講する授業であるため理科教育関連の授業の導入科目に位置づけ、他の授業への展開を意図して、授業・カリキュラム分析、教材研究、ワークシート作成などの具体的活動をメインテーマにした。このあと、学生は2回生で理科教育の理論や教科専門を学び、3回生で指導案作りと模擬授業を行う「理科教育実践研究Ⅱ」を履修して、教育実習に臨む。授業方法に関しては、2名の教員がチームティーチングで教材研究とワークシートづくりを指導するという改善を行った。そして、一番の改善点が、④で示した理科教育研修会での授業成果の発表である。結果を伝える相手を現職教員に設定したことによって、学生の緊張感やプレッシャーを高めた。

授業改善の成果を「理科教育実践研究Ⅰ」の受講生に対する授業評価から探ると、学生の授業に対する満足度は2006年度が87.3点、2007年度が77.8点であった。満足度は2008年度の方が下がっているが、これは学生の自由記述より「自分の思ったことをうまくまとめて発表できなかった」「まだまだ不完全な研究なので、お見せするのが申し訳なかった」という、教材研究が十分でなかったことが原因になっていた。このような十分でないという実感は、今後の学習課題や意欲につながるのではないかと期待される。また、理科教育研修会における教員との交流は、「自分たちでは思いもつかない生徒の考え方や発展した内容のなどを教えてくださいまして自分にプラスになることが多くてよかった」「実際に行うときのことを考えたつもりだったのですが本当に「つもり」だったようです」「現場の先生から発想がおもしろいという言葉をいただいたときは本当にうれしかったです」など多くの感想を導いた。現職教員からも、「学生さんから「面白いと思った」「もっと他のことにも挑戦してみたい」という声があり、科学する心が育っているなど感じました」「大学生ならではの発想を見ることができてよい。直接授業で使えるかどうかは別として、教材研究や実験方法を考える際のヒントが多くある」などの感想をいただき、小・中・高校の教員にとっても十分に研修になっているという回答を得た。なお、これらの教育改善のプロセスと成果は、愛媛大学教育実践総合センター紀要第25号(2007)と26号(2008:印刷中)で報告し、次の授業改善や他の授業における授業改善の資料として残すようにしている。

## 大学院教育の改善

## 理工学研究科(工学系) 平岡耕一准教授 他

本学大学院理工学研究科物質生命工学専攻機能材料工学コースにおける大学院博士前期課程実習授業「研究教育能力開発実習」(授業担当者:機能材料工学コース田中寿郎教授,同平岡耕一准教授,同小林千悟准教授)は、大学院授業の実質化及び大学院生の「社会人基礎力」養成のために平成17年度より実施されている通年6単位の実習授業である。本実習授業では、大学院1年生が1グループ4名程度のグループを組み、前期半年間で、本学工学部機能材料工学科1年生で実施している実験授業「工学基礎実験」における新規テーマを企画・開発・準備を行い、後期授業実習として、実地に学部1年生に対して各院生グループが準備した新規実験の指導・実施を行うものである。この授業を通して、院生は、新しいものを企画・開発するために現状における問題点の調査、新規実験テーマの目的・意義・得られる効果等を考え、また実施のために必要な実験装置の開発・必要物品の調査・購入・装置作りを実地に経験する。また、これらの活動により、グループ内での役割分担・コミュニケーションを通してマネジメント能力の開発や、指導教員とのディスカッション・中間報告会などの報告会の実施によるプレゼンテーション能力の開発を行う。この授業の実施により、大学院授業の実質化に寄与するとともに、これまでなされていなかった、院生の実務的能力開発に対して新たな一面を切り開くことに寄与している。

## 1. 授業改善の背景

地域環境工学専門教育コースでは、教育システムを継続的に改善するため、年度末毎に独自に学生アンケートを行い、その結果を元に次年度の共通改善目標を決定し、その成果を次年度の学生アンケート及び教員の自己評価により確認するという、スパイラルアップシステムを構築している（当コースHP参照）。平成19年度の共通改善目標は「学生が到達度を自己評価できる授業の実施」であり、これを実現するための手段として、学生向けの「到達度自己評価票」を各授業で作成し配布することとなった。

## 2. 「計画デザイン演習」（3年後期担当）での取り組み

### 1) 到達目標の細分化

シラバスに定めた到達目標1～4を細分化し、「到達度自己評価票」を作成した。これにより、各到達目標を達成するために求められる具体的な行動を学生に示した。また、本票を1回目の授業で配布することにより、到達目標に対する各授業の位置づけが明確になり、到達目標を念頭においた学生の主体的な取り組みを引き出されたと思われる。

### 2) 到達度の自己評価

学生は、4つの到達目標とそれを細分化した22の小項目に対し、以下のランク付で自己評価を行った。自己評価は、7回目の授業で中間評価、14回目の授業で最終評価を実施した。

- 0：ほとんど到達していない。（到達レベル1割以下）
- 1：少しは到達している。（到達レベル1割～6割）
- 2：ある程度到達している。（到達レベル6割～8割）
- 3：十分に到達している。（到達レベル8割以上）

### 3) 成績評価方法の細分化

シラバスに提示した4つの到達目標に応じて評価内容を7項目に細分化し配点した。これにより、演習に対する取り組み状況を多角的かつ具体的に評価して、より客観的な採点を行うよう努めた。

また、上記配点を学生にも開示した。これにより、学生は、自身が記入した到達目標自己評価票を到達目標毎の配点表に照らし合わせ、成績の客観的な自己評価を行うことができるようになった。このことは、教員・学生相互に納得のいく成績評価を実施につながったと考えている。今後は、教員・学生相互により客観的な到達度評価を実施できるよう、配点方法のさらなる具体化が課題であると考えている。